

## 2026年3月1日 説教「迷子の羊」

### ルカの福音書 15章 1～7節

14章においては、安息日において水腫を患った者の癒しと、宴への招きについての話が三つありました。自らを低くすることの教えがなされ、神の国への招きを受け取る人、断る人についても語られました。また、最後の部分で中途半端にではなく、徹底して主に従うことについても教えられました。

#### 1. 徹底して従う (1～3節)

##### ① 罪人たちがみもとに来て (1) 「さて、取税人、罪人たちがみな、イエスの話を聞こうとして、みもとに近寄って来た。」

イエスの話を聞こうとして集まってきた人々の背景が取えて記されています。社会にはいろいろな職業や層の人々がいましたが、ここには、二つが種類の人々が特別に記されます。一番目は取税人たちです。ローマ政府の課する税の取り立ての役割を担った人々です。あのザアカイは取税人の頭でした(19章)。また、罪人たちとありますが、どうして外から見てわかるのでしょうか。レビ記を読んでみてください。禁止されていることは多いのです。社会の吹き溜まりにある取税人や遊女のように、罪を犯す人々。彼らは、律法を犯しているということはわかっていたでしょう。咎めもありました。そんなこともあり、イエスのもとに、そうした人々がやって来たのです。

##### ② パリサイ人達をつぶやき (2) 「すると、パリサイ人、律法学者たちは、つぶやいてこう言った。『この人は、罪人たちを受け入れて、食事までいっしょにする。』」

イエスの様子を見ていた人々は、批判的につぶやいたのです。イエスは罪人たちを受け入れて、食事まで一緒にしていると。食事を一緒にすることは、家族のようにして迎えることです。パリサイ人たちにとって、律法違反を重ねていることが明らかな人々は罪人でした。そんな人々を受け入れるということは断じて許せないことでした。

##### ③ イエスは話された (3) 「そこで、イエスは、彼らにこのようなたとえを話された。」

イエスはパリサイ人や律法学者たちの批判を受けて、たとえ話を始められました。ここからは、三つの話がなされます。まったく異なることが話されているように見えますが、それぞれは同心円の中の円のようで、一つのこと

#### 2. いくなくなった羊の話 (4節)

##### ① 羊百匹をもっている人 (4) 「『あなたがたのうちに羊を百匹もっている人がいて、』」

第一のたとえ話は、百匹の羊を持つ人がいたというところに始まります。彼は羊飼いであります。旧約の世界を見渡せば、ヤコブも羊飼いでした。その妻のラケルもそうでした。また、ダビデも羊飼いをしていました。さらに、イエスの誕生の時に ベツレヘム郊外にいたのも羊飼いたちです。ユダヤの地であって、羊は欠かせない動物で、羊飼いという仕事については、話を

聞く誰もが知っている職業でありました。

②九十九匹は野原に残し (4) 『**そのうちの一匹をなくしたら、**』

さて、その羊飼いは羊を野に連れて行ったのです。そこで羊たちに草を食ませるためであったでしょう。一定の時間の後に、羊たちを引き連れて戻ろうとしたところ、どうしても一匹の姿が見当たらないのです。羊飼いはなくなった羊の顔や姿を覚えていたかもしれません。何回見渡しても、見つからない。その羊は、迷子になってしまったのです。

③一匹を見つけるまで捜し (4) 『**その人は九十九匹を野原に残して、いなくなった一匹を見つけるまで捜し歩かないでしょうか。**』

羊飼いはその一匹を捜し始めました。そのために、九十九匹は野原に残しました。たとえ話ではいろいろ詮索しなくて良いのですが、九十九匹の安全は保たれるようにしておいたのでしょう。ともかくは、この一匹を捜すことに全力をあげたのです。

3. 羊が見つかった時の喜び (5~7 節)

①見つけたら (5) 『**見つけたら、大喜びでその羊をかついで、**』

山を越え、谷に降り、穴に落ちていないかなどと探ったことでしょう。そしてようやくして見つかりました。そして大喜びしたのです。それは彼がその羊をかついだ、ということからわかります。

②近所の人々を集め (6) 『**帰って来て、友だちや近所の人たちを呼び集め、《いなくなった羊を見つけましたから、いっしょに喜んでください》というでしょう**』

そして、帰ってからは、友だち、近所の人たちを呼び集めるというのです。それほどうれしかったのです。「皆さん、ご心配をかけましたが、いなくなった羊が見つかりました。一緒に喜んでください!」。

ここで、たとえ話は終わります。

③一人の罪人が罪を悔い改めるなら (7) 『**あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人にまさる喜びが天にあるのです。**』

イエス・キリストは、このたとえ話をまとめて教えられます。「一匹の羊は一人の罪人だと考えてみましょう。その人は迷子の羊のように、神から離れていました。しかし、罪人も悔い改めて立ち返るなら救われるのです。逆に、九十九人の人が自らを律法を守っているから正しいのだと自負し、悔い改めることがないのなら、イエス・キリストによる救いにあずかることはできないのです。ともあれ、一人の罪人の悔い改めることは、天において大いなる喜びがあるというのがイエスのまとめです。

《**展開と結論**》

今朝からルカの福音書も 15 章に入りました。

この話に出てくる羊とは、罪深い私たちのことです。羊は弱く、知恵に乏しく、迷いやすい存在です。そこで、自分をそんなマイナスイメージの存在にた

とえられるのは、心外だと思われる方もいるでしょう。しかし、イエスは人間が救われるとはどういうことなのかを教えるために、あえて羊を例にとられているのです。もっとも、人間を羊にたとえているのは、旧約聖書のなかにも出てくることでした。詩篇 23 篇には、「主は私の羊飼い。私は乏しいことがありません。」でこの詩は始まります。作者のダビデは、自分は羊であり、主なる神が羊飼いとしているのです。また、エゼキエル書 34 章は全篇にわたり、牧者と羊について語っています。そして何と言ってもイザヤ書 53 篇 6 節には「私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの自分勝手な道に向かっていった。」とあって今朝の聖書箇所のとえ話と同じモチーフとなっています。道に迷うというのは、本来あるべき神様との関係を見失ってしまっていることを示している、と言って差し支えありません。

「多岐亡羊」という言葉があります。中国の「列子」の説符篇という中にあるそうですが、迷いだした羊を見つけるために、雇い人たちが捜しに出ます。けれども先に進むと、枝道が出て分かれ、進めば進むほど道が多くなり羊は見つからず、しもべたちは疲れて帰ってきたという話だそうです(丹羽銀之「迷える羊」より)。でも、考えてみれば、迷子の羊が見つからない事は、現実的には多くあり、私たち人間もさ迷って神との関係から遠く離れてしまい、帰る道がわからなくなることはよくあるのです。

ここで、注目したいことは、迷子の羊を捜し求める羊飼いのことです。ヨハネの福音書 10 章には、羊は羊飼いの声を知っていて彼についていくとあります。羊飼いは羊の一匹ずつをよく知っています。そして、「良い牧者は羊のためにいのちを捨てる」(11 節)のです。羊飼いは命をすてる覚悟を持って、迷子の羊を捜すのです。場合によっては狼などに遭遇しても、羊を守るためには命をかけるのです。この羊飼いきそ、イエス・キリストです。一匹の羊を愛する羊飼いのように、「主イエスは私たちを気にかけてくださる」のです。問題は、ここで言う「私たち」とは誰なのかということです。自分を正しいとするパリサイ人たちは捜す必要がありません。救いを必要としていないからです。一方、迷子を自他ともに認める罪人たちは、自分の罪深さを自覚し助けを求めていました。そして、自力でどうにもならないことがわかっていました。金、性、名誉(プライド)などが、絡み合ってきて、したくないことでも結局してしまうのです。パウロも告白しているのですから、立場は関係ありません。罪人はまさに迷子の羊と同じで、どうしたら良いのかわからないので神に救いを求めるのです。そんな者たちに主イエスは手を差し伸べて、ご自身が私たちの罪のため身代わりとなってくださるのです。この方は、罪の悔い改めを促し、赦しを与えて、救ってくださるのです。

このたとえ話をパリサイ人はどのように受け取ったのでしょうか。自分たちへのあてこすりだと聞いたのでしょうか。実は彼らも自分の罪を認めて、主の前に出るならば、主の恵みにあずかることができるのです。

私たちも同じです。罪人であると自覚し迷う者を、主は捜して見つけ出してくださいます。私たちの側でも、聖なる主の前に出ていきましょう。